

4 分析結果の概要

(1) 論理的文章（大問〔一〕）を読む力について

土井隆義『キャラ化する／される子どもたち』より出題した。本文は、価値観が多様化した社会において、自らを一貫したアイデンティティの持ち主としてではなく、「キャラ（単純明快で固定的な役割）」として示すことで人間関係の安定を図る子どもたちの心性を読み解いたものである。空欄に適語を補充させたり、筆者の意図を尋ねたりしたが、いずれも全体の文脈に即して答える必要があるため、各層の間でそれぞれ正答率に顕著な差があった。各段落の要旨を押さえた上で、全体の構成を理解する力を育てる必要がある。

(2) 文学的文章（大問〔二〕）を読む力について

井上靖の小説『桶狭間』より出題した。本文は、主人公織田信長が万松寺にて父の一周忌の法要を行う場面である。歴史小説であり、なじみの薄い言葉や難解な語彙が含まれているため、特に下位層の正答率が低く、上・中位層との差が開いた。慣用句の意味が分からないなど、全体的に読書量の不足が感じられる結果となったので、読書指導に力を入れたい。

(3) 国語基礎力（大問〔三〕）について

前半は、統計資料をレポート作成に活用する力を問う問題を出題した。後半は、敬語の正しい用法、外来語及び副詞の意味、係り受けの関係、漢字の読み書きについて出題した。前半では、複数の情報を組み合わせて結論を導くことに課題が見られたため、授業における言語活動を通じて、情報を活用しつつ課題を解決する力を伸ばす指導が有効であろう。

(4) 古文（大問〔四〕）を読む力について

鎌倉時代中期の説話集『十訓抄』より出題した。文章博士大江匡衡の心配りをたたえる話であるが、中・下位層では、作品の主題を理解することが難しかったようである。古語や文法の知識を増やすと同時に、生徒が説話の内容に魅力を感じられるよう、指導の工夫をすることが望まれる。